

シンポジウム「医療と文化」-3

渋沢栄一の医療と文化に対する貢献

稲松 孝思

東京都健康長寿医療センター顧問

渋沢栄一は日本資本主義の父と言われる経済人であるが、若年時より終生社会事業に関わり、近年その公益重視の行動が評価され、一万円札の肖像に取り上げられた。彼の各種社会事業への取り組みについて概観すると、養育院とのかかわりは半世紀を超え、しかも深い。養育院は1872(明治5)年に東京府知事・大久保一翁が、共有金(江戸期の七分積金)により、市中の鰥寡孤独を収容する恒久施設を設立したことに端を発する。その後静岡藩以来旧知の渋沢栄一に共有金の運用を託したことで渋沢がその維持発展に尽くすのである。共有金が枯渇し、税により養育院が維持されるようになると、怠け者を増やすだけの養育院を維持するのは税の無駄使いと府議会は主張し、公営の養育院は廃止の方向になった。養育院の存在意義を重視する渋沢は、委任経営を引き受け、バザーなどによる資金確保、伊達宗城ら大物による養育院委員会体制、橋本綱常や入沢達吉などの東大教授・助教授の養育院医長兼任体制を作った。養育院の生みの親は大久保一翁、育ての親が渋沢栄一と言えよう。その後渋沢は、養育院以外の多数の施設に関与する。キリスト教関係の施設も多いが、渋沢自身に宗教的背景はなく、論語精神や日本社会の仏教者への配慮もあるらしい。宗派を超えた運動、帰一協会や協調会などへの志向がある。

養育院の病弱の子供たちに死亡例の多いことについて渋沢は、養育院医長を兼任する入沢達吉に相談した。入沢達吉は、東京医学校のお雇い教授E.vonベルツの弟子で、ドイツ留学後、東大助教授(後にベルツ後任教授)になり、1897年に養育院医長を兼任していた。病弱児童の臨海生活を提案し、房総勝浦の寺を借りて臨海生活を試みたところ死亡率が著しく改善した。当時、結核症に対する大気安静療法がいわれだした頃である。地元民により、当時懇意であった三島中洲の文案、渋沢の揮毫で、巨大な磨崖碑が作られ、日本の福祉事業の記念碑となっている。入澤は、お雇い医師ベルツからの学び、留学経験などを反映させて提案し、養育院幹事の安達憲忠、若手医師の光田健輔らが熱心に実行したものである。高齢の渋沢自身も遠隔地の分院を7回訪れている。以下に碑文を示すが、養育院の果たした役割がよく表現されている。「維新之後、東京府収養無告窮民、上野護国院内、名曰養育院、後又撫育棄兒、凡四十年其数三万七千余人、現在二千四百余人、而児童最多蓋本院資白河楽翁公遺制府民蓄積創之、以慈善家捐資増之、以院長渋沢男尽瘁成之、規模年宏、三十三年移養甚羸弱者於房州船形町凡百余人、築新屋置小費名曰養育支院、凡十年、多免夭殤、聞者感歎、東京慈善会大贊助之、郷紳寄贈土地及貨幣者頗多、頃若男臨視大喜、益欲拡張之、徵余銘刻之崖壁、乃作詞曰 哀矣榮独、矧蒲柳質。仁人維謀。養院維築。房海之浜。冬温夏涼。疾者乃愈。弱者乃強。爰授生業。爰教綱常。可憐群兒。成立思恩。安知不出。濟民仁人。」大正三年甲寅十二月、從三位勳二等文学博士 三島毅撰、從三位 勳一等 男爵 渋沢栄一書。三島毅(中洲)は渋沢の論語と算盤の考えを共有し、以後の渋沢の論語の研究、斯文会、孔子廟の再建、二松学舎などで関わりあうことになる。また渋沢は、松平定信(楽翁)顕彰にも熱心に取り組み、楽翁公伝の出版、南湖神社設立の援助などを行っている。渋沢は書画骨董、作庭、別荘などには興味なく、社会事業、教育事業、民間外交、災害援助などの公益活動に熱心であった。彼自身は医師ではないが、幕末のヨーロッパ体験から西欧の仕組み導入の必要性を強く感じている。社会事業の内容では、入澤らの東大グループの影響下で事業を進めることになる。寄付組織にしばしば登場、先導し、財界人にフィランソロピーの道筋をつけたことも評価すべきであろう。